

ODIP 4.2 修正パッチ (P1040204005562) リリースノート

2023/4/6

(株) インテリジェント・モデル

ODIP は、(株) インテリジェント・モデル社の登録商標です。

本書に掲載された情報に基づいた行為の結果として発生した損害、利益の損失、経費などについて、(株) インテリジェント・モデルならびに本書の製作関係者は一切の責任を負いません。

本書は著作権法上の保護を受けています。本書の一部あるいは全部を無断で転載・複製することは法律で定められた場合を除き、禁止されています。

目 次

A. 変更内容	4
1. DBMS 設定ファイルの TRUNCATE オプションの改定	4
B. バージョンアップによる影響	5
C. パッチの適用方法.....	5
1. ライブラリファイルの更新.....	5
2. パッチ適用後の確認.....	6

A. 変更内容

1. DBMS 設定ファイルの TRUNCATE オプションの改定

ODIP は、例えばジョブ開始時の出力先テーブルの初期化など、データベース上のテーブルに対して全行を削除してテーブルを空にする操作を行うことがあります。この操作は、DBMS ごとに既定の構文を用いていて、設定によって変更することができませんでした。クラウドサービスの普及に伴って、DBMS の稼働環境が多様化し、同じ DBMS であっても稼働環境に応じて異なる構文を用いるケースが出ています。本パッチでは、DBMS の設定ファイルに SQL 文のテンプレートを指定することで、稼働環境に合わせて異なる構文を用いることができるようにしています。

(1) DBMS 設定ファイルのオプションの追加

DBMS 設定ファイル (<dbms>.properties) に下記のオプションを追加しました。

オプション	説明
sql.template.truncate = [truncate statement with <tablename> variable]	テーブルの全行を削除する SQL 文のテンプレートを指定します。変数の<tablename>は、実行時にテーブル名に置換されます。このオプションの指定がない場合には、これまでのバージョンと同じ既定の構文を使用します。
sql.commit.before.truncate = [true false]	テーブルの全行を削除する SQL 文を発行する直前に commit を行うか否かを true か false で指定します。DBMS によっては、特定の命令 (例えば、DB2 for luw の TRUNCATE 文) は、トランザクション内の最初にだけ実行可能な場合があります。このオプションを true に設定すると、テーブルの全行を削除する SQL 文を、確実にトランザクション内で最初に実行することができます。

(2) DB2 の DBMS 設定ファイルの初期設定を追加

DB2 for luw の DBMS 設定ファイル (db2.properties) の初期設定に、上記で追加されたオプション設定を追加しました。

オプションの初期設定	説明
sql.template.truncate = TRUNCATE TABLE <tablename> IMMEDIATE	DB2 for luw のテーブルの全行を削除する既定の SQL 文は次のとおりです。稼働環境によっては、この構文がエラーになる場合があります。TRUNCATE 文を初期設定することで、稼働環境による構文エラーの発生を防ぎます。DB2 for luw 9.6 以前のデータベースをご利用の場合は、TRUNCATE 文のサポートがありません。本オプションに既定の構文を指定してください。 [既定の構文] ALTER TABLE <tablename> ACTIVATE NOT LOGGED INITIALLY WITH EMPTY TABLE
sql.commit.before.truncate = true	上記の初期設定に合わせて、TRUNCATE 文を確実にトランザクションの最初に実行するために、commit 文を実行します。

B. バージョンアップによる影響

既存の定義への影響はありません。

C. パッチの適用方法

本パッチは、次の ODIP 製品に適用してください。

- ODIP アドミニストレータ v4.2
- ODIP オペレーションマネージャ v4.2
- ODIP リポジトリマネージャ v4.2
- ODIP プロセスマネージャ v4.2
- ODIP リポジトリサーバ v4.2
- ODIP トランスフォーマ v4.2

1. ライブラリファイルの更新

実行中の ODIP 製品を終了し、ODIP_P1040204005562 フォルダに格納されているライブラリファイル、プロパティファイルを、表 1 のファイルのコピー先に上書きコピーしてください。

表 1 ODIP_P1040204005562 のフォルダ構成及びファイルのコピー先

ODIP_P1040204005562	ファイルのコピー先
lib	
ADM	ODIP アドミニストレータの lib フォルダ
OPE	ODIP オペレーションマネージャの lib フォルダ
RPM	ODIP リポジトリマネージャの lib フォルダ
RPS	ODIP リポジトリサーバの lib フォルダ
TFM	ODIP トランスフォーマの lib フォルダ
config	
TFM	
jdbcsample	ODIP トランスフォーマの config 配下の jdbcsample フォルダ

2. パッチ適用後の確認

パッチ適用後は、各製品を起動し、表 2 の確認方法に従って確認を行ってください。

表 2 パッチ適用後の確認方法

製品名	確認方法
ODIP アドミニストレータ	ヘルプメニューから“ODIP について”を選択し、表示されたすべてのビルド ID が 1040204005562 であることを確認してください。
ODIP オペレーションマネージャ	
ODIP リポジトリマネージャ	
ODIP プロセスマネージャ	
ODIP リポジトリサーバ	ODIP リポジトリマネージャのツールメニューから"ORMS サーバ情報"を選択し、表示されたすべてのビルド ID が 1040204005562 であることを確認してください。
ODIP トランスフォーマ	ODIP トランスフォーマを起動し、showserver コマンドを、オプションに“-info version”を指定して実行してください。表示されたすべてのビルド ID が 1040204005562 であることを確認してください。

以 上